

博多180

－博多遺跡群第237次発掘調査報告－

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1423集

2021

福岡市教育委員会

博 多 180

- 博多遺跡群第237次発掘調査報告 -

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第1423集



2021

福岡市教育委員会



全景（東から）

序

福岡市には、豊かな自然と、文化遺産がのこされています。地理的位置から、古くから対外交渉の拠点の一つとして大きな役割を担ってきました。

これら先人の遺産を保護し未来へと伝えていくことは、私たちの重要な務めです。

福岡市教育委員会では、開発によってやむを得ず失われていく埋蔵文化財について、事前に発掘調査を実施し、記録の保存、出土遺物などの活用に努めています。

本書は、博多区役所整備に伴い、令和2年1月から3月にかけて発掘調査を実施した博多遺跡群第237次調査の成果を報告するものです。遺跡のある博多は中世において対外交渉の一大拠点として大きな役割を果たしました。今回の報告は中世後半～末にかけての要害の地とみられる区域の調査で、調査成果は、城塞都市としての博多を解明する上で的一助になるものと考えます。

本書が文化財に対する認識と理解を深めていく上で広く活用されますとともに、学術研究の分野で役立つことができれば幸いです。

発掘調査から本書の刊行に至るまで、関係者の方々とのご理解とご協力を賜りましたことに対し、ここからの感謝の意を表する次第です。

福岡市教育委員会

教育長 星子 明夫

令和3年3月25日

例　　言

1. 本書は福岡市教育委員会が庁舎建設に伴い、福岡市博多区博多駅前二丁目 174-2 で発掘調査を実施した博多遺跡群第 237 次調査の報告である。
1. 本書で報告する調査の細目は下表のとおりである。

調査番号	遺跡略号	調査対象面積	調査面積	調査期間
1954	H K T - 237	150 m ²	158.4m ²	2020 年 1 月 14 日～3 月 11 日

1. 本書に掲載した遺構の写真撮影は調査担当の佐藤一郎（埋蔵文化財課主任文化財主事）、実測は担当者の他、技能員の藤野雅基が行い、製図は佐藤、整理補助職員の鳥井幸代が行った。
1. 遺物の実測は一部を佐藤、他は技能員の棚町陽子、製図は技能員の久富美智子が行った。
1. 遺物の整理は整理補助職員の鳥井・甲斐田嘉子が行った。
1. 遺構は 2 行の通し番号を行い、遺構の種類に応じて SD（溝）の略号を番号の前につけた。
1. 本書に関わる図面、写真、遺物など一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵、保管される予定である。
- 1 本書の執筆、編集は佐藤が行った。

本文目次

Iはじめに.....	5
1. 調査に至る経緯.....	5
2. 調査の組織.....	5
II遺跡の位置と歴史的環境.....	6
III調査の記録	
1 調査の概要.....	6
2 遺構と遺物	
(1) 遺構.....	8
(2) 遺物.....	8
IV小結.....	12

挿図目次

第1図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺 1/8000）.....	4
第2図 博多遺跡群第 237 次調査発掘地（縮尺 1/1000）.....	5
第3図 博多遺跡群第 237 次調査遺構配置図 1（縮尺 1/200）.....	7
第4図 博多遺跡群第 237 次調査土層図 1（縮尺 1/60）.....	7
第5図 出土遺物実測図 1（縮尺 1/3） 1 調査の概要.....	9
第6図 出土瓦実測図 1（縮尺 1/4）.....	10
第7図 出土瓦実測図 2（縮尺 1/4・1/3）.....	11

図版目次

図版1

1. 全景 2. 全景

図版2

1. 北東壁面 2. SD01 土層
3. 北西壁面 4. 北東壁面

図版3

1. 白地鉄絵花卉文壺出土状況 2. 南壁土師器出土状況
3. 陶器出土状況 4. 陶器出土状況



第1図 博多遺跡群発掘区域図（縮尺 1/8000）

I は じ め に

1. 調査に至る経緯

2015（平成27）年5月14日に福岡市市民局総務部施設整備担当から同経済観光文化局埋蔵文化財審査課に対して、博多区博多駅前二丁目174-2における博多区役所整備に伴う埋蔵文化財の有無についての照会文書（27-1-22）が申請された。申請地は周知の埋蔵文化財であるところの博多遺跡群の南西端中央に位置し、房州堀推定ラインに位置する。申請地の北隣地では博多警察署庁舎建設に伴って112次調査が行われている。埋蔵文化財審査課はこれを受けて同年5月18日に仮庁舎建設用地内の試掘調査を行った。調査地の現況は公園として利用されており、確認調査が可能な位置を事前に選定し、バックホーを入れトレンチの掘削を行った。申請地北東隅のトレントンでは現地表下-0.7mの近現代の堆積とみられる黒褐色土層下で石組を確認、その下層で灰褐色粘質土層・黄褐色粗砂層・灰褐色粘質土層と黄褐色粗砂混じりの互層を経て、現地表下-1.1m以下で黄褐色粗砂を確認した。灰褐色粘質土層からは近世磁器・瓦が出土している。トレントン位置の制約から堀の立ち上がりは確認できなかったが、トレントン北壁で堀の堆積土とみられる灰褐色土が確認されたことから、房州堀の一部と見なした。申請地の北東隅以外については、周辺の確認調査の知見から調査不要と判断した。埋蔵文化財課と市民局は文化財保護に関する協議をもったが、杭打設による影響が及ぶ150mを対象に記録保存のための発掘調査を行うことになった。調査は2020（令和2）年1月14日から3月11日まで行われ、整理・報告は令和2年度に行うこととした。

2. 調査の組織

発掘調査令達 福岡市市民局総務部施設整備担当
発掘調査（令和元年度）・資料整理（令和2年度）

福岡市経済観光文化局文化財部埋蔵文化財課



第2図 博多遺跡群第237次調査発掘地（縮尺 1/1000）

課長 菅波 正人 調査第1係長 吉武 学 事前審査係長 本田 浩二郎

事前審査担当 松崎 友理・神 啓崇（文化財主事）

発掘調査・資料整理担当 佐藤 一郎（主任文化財主事）

試掘調査は平成27年度埋蔵文化財審査課事前審査係の福嶋美由紀（文化財主事）、調査・整理の庶務は文化財活用部文化財活用課の松原加奈枝が行った。公園管理担当の博多区役所維持管理課、発掘作業員、整理補助職員の方々のご協力により発掘調査、報告書作成に至ったことに対し謝意を表する。

II 遺跡の位置と歴史的環境

博多遺跡群は福岡平野の中央、那珂川河口部右岸に位置し、博多湾岸に沿って形成された古砂丘上に立地する。調査地は遺跡南端に位置し、房州堀推定ラインに近接する。房州堀について、築造にふれた一次資料ではなく、近世の地誌『筑前国続風土記』（1709年）によると、大友氏の家臣白杵安房守鑑磨が元亀・天正年間（1570～1592）に掘らせた。あるいは、大内氏が博多を支配していた時期に築造された堀を白杵氏により補修したとする。さらに、白杵氏は治水のために現在博多遺跡群の東境界をなす御笠川（石堂川）を開削し、南側を流れていた旧御笠川（比恵川）と付け替えたと記している。

房州堀の推定ラインは近世絵図を元に設定されたもので、萬行寺の南側を画する煉瓦塀下部の石垣を房州堀の北岸に護岸のために築かれた遺構と見做す説もある。

◇参考文献

佐伯弘司・小林茂「文献および絵図・地図からみた房州堀」

磯望「博多第57地点の地形と地質」

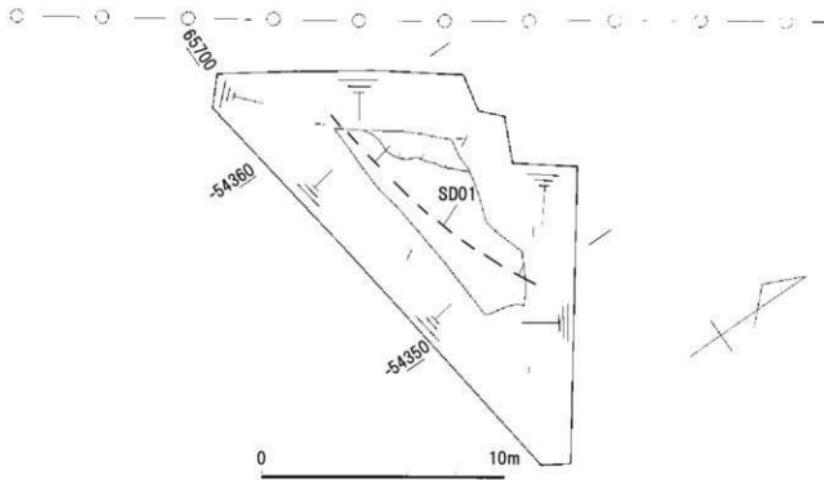
（福岡市教育委員会 1991『博多22』福岡市埋蔵文化財調査報告書第250集 所載）

III 調査の記録

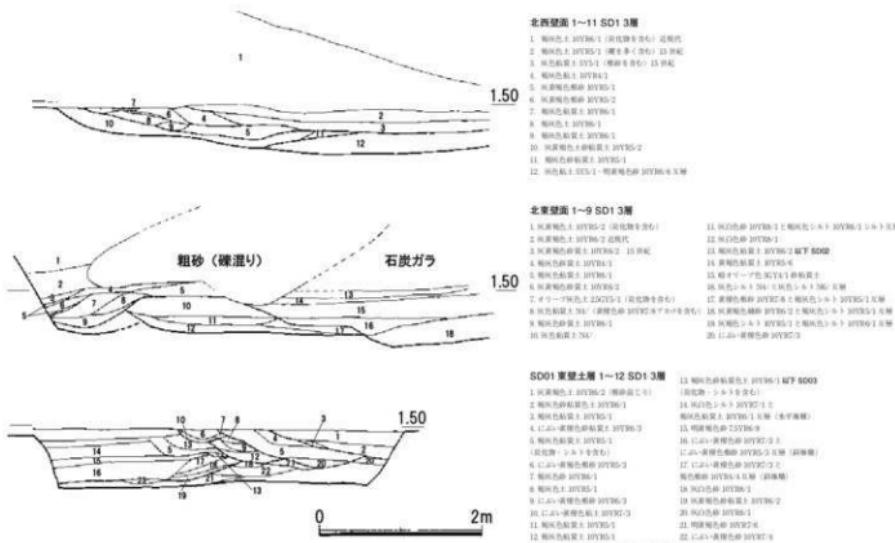
1. 調査の概要

調査対象地を含む藤田公園は発掘調査中を含め市民の憩いの場として利用され、東西・南北が長さ17mの直角三角形を呈する調査対象地については調査に先行して園路の舗装や植栽の撤去、ガードフェンスによる囲繞を行い、調査開始前日には残土置場の確保や外部からの侵入者防止のためより広い範囲の囲繞を行った。1月14日から表土剥ぎ、壁面養生シート張り、試掘トレンチ掘り下げを行い、

20日からはSD01 2層掘り下げ、21日からは擾乱掘り下げ、調査区西半は重機を用いて灰褐色粘質土まで掘り下げた。粗砂混じり明灰褐色土を南側肩部と見做してきたが、その後近代以降の堆積と判明した。2月3日からはSD01 3層（灰褐色土）掘り下げを行った。間に灰白色粘土を挟む部位あるが。その後南岸の壁が不明瞭なのでサブトレンチを入れ、地山白色～黄白色細砂面を確認した。7日には東半部粗砂が石炭ガラを含む近代の客土であることが判明し、重機を用いて掘り下げた。10日からは調査区を直角に切るSD02、調査区南のSD03掘下げたが土層のみの確認で、平面プランは押さえられなかった。20日に全景の写真撮影を行い、その後三角形の調査区鋭角部分である北西壁面拡張し、26日に写真撮影・土層実測、その後北東壁面清掃・写真撮影、27日に平面・北東壁面土層実測を行い、その後埋戻し、外柵撤去・付替えなど調査前の状況への復旧作業を行い、3月10日に発掘機材の撤収、11日に借上機材の返却等の残務作業を行い、調査が終了した。



第3図 博多遺跡群第237次調査構造配置図1 (縮尺 1/200)



第4図 博多遺跡群第237次調査土層図1 (縮尺 1/60)

2. 遺構と遺物

検出遺構

溝・流路

SD01 当初、試掘で確認されたレベルで近世以降の溝を SD01 2 層として検出に当たったが、下層の粗砂が近代以降の堆積と判明し、その層を除去後、中世後期の堆積を 3 層として掘下げ作業を進めた。平面プランについては明確には捉えられなかった。

出土遺物

SD01 3 層出土遺物（第 5 ~ 7 図）

土師器 底部は糸切り離し、体部外面から内底まで横ナデを施す。

特小皿（1・2）口径 7.0・7.2cm、器高 1.7・1.8cm を測る。2 口縁端部に煤が付着する。

小皿（3～5）口径 7.8～9.1cm、器高 1.2～1.4cm を測る。

杯（6）口径 11.9cm、器高 2.8cm を測る。

青磁 碗（7・8）底部片で、7 は断面逆台形の高台の外側まで施釉する。8 は高台内外の端部を斜めに削り出し、全面施釉の後、高台内の釉を輪状に搔き取る。

高台付皿（9・10）9 は口縁部が外反し、内底に花文をスタンプする。全面施釉の後、高台内の釉を輪剥ぎする。10 は底部片で、内底に花文をスタンプするが、釉が不透明で明瞭には見えない。高台の外側まで施釉する。

陶器 壺（11）磁州窯白地鉄絵花卉文壺の底部片である。

瓦質土器 すり鉢（12）片口が付く口縁部片で、口縁部外面は横ナデ、内面はハケ目を施し、6 本単位のすり目を入れる。

湯釜（13）鍔が付く体部中位以下の破片で、外面は鍔付近が横ナデ、鍔直下はハケ目、下位は器表が剥離し、内面は横ナデを施す。

火鉢（14）平面形が角形の火鉢口縁部片で、口縁部は内側に L 字屈曲し、外面に四菱文を押印する。

石製品 砥石（15）四面とも研ぎ面として利用している。

温石（16）滑石製石鍋片を再加工し、札状にする。

棒状石製品（17）断面隅丸方形の棒状を呈し、四周を平滑にする。

投弾（18）粗く成形された径 3.1cm の球体で、1/3 程度欠失部位がある。

以下、3 層から出土した混入・流れ込み遺物である。

須恵器 蓋（19）天井部が高く扁平で、口縁部との境は明瞭である。口縁端部は丸みをもった断面三角形状を呈する。

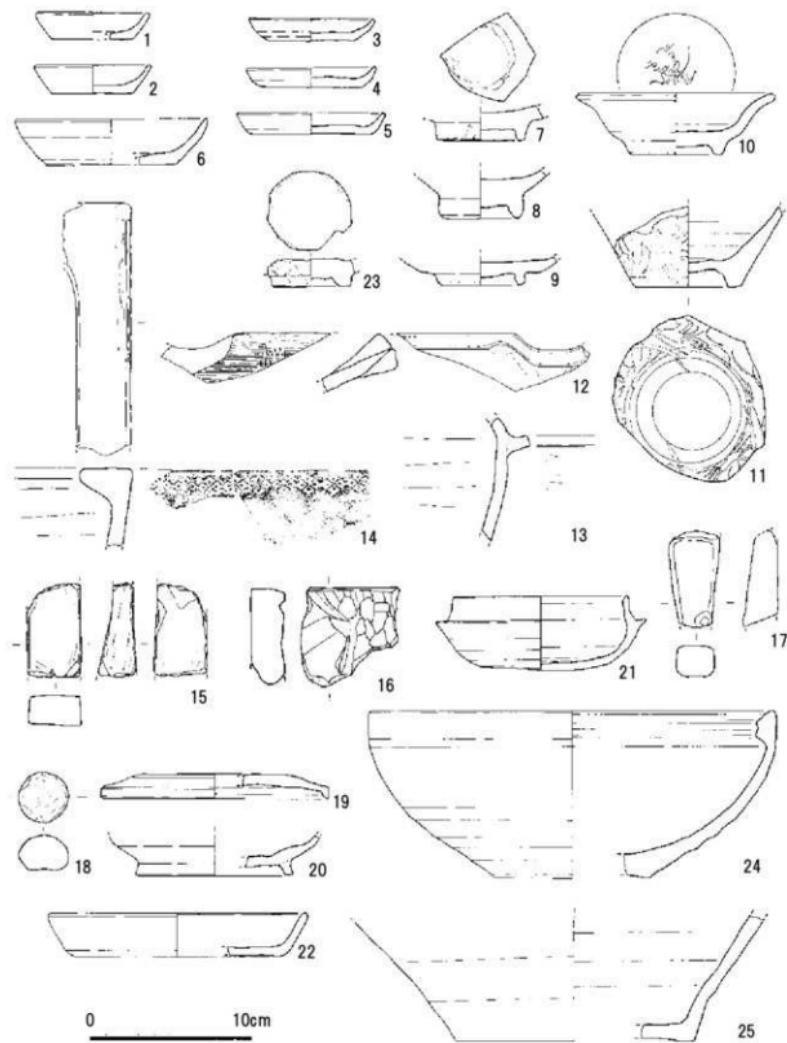
杯（20・21）20 は体部下位以下の破片で、体部と底部の境は丸みを帯び緩く稜が付く。外底にはやや外に開く低い高台を外縁より内側に貼付する。21 は口縁端部が内傾し、口径 10.6cm、器高 4.5cm を測る。立ち上がりは高さ 1.5cm を測り、基部から外反し直立する。底部は回転ヘラ削り、その他の部位は回転横ナデを施す。

土師器 杯（22）底部は糸切り離し、体部は回転横ナデ、内底はナデ、外底には板状压痕が残る。口径 16.0cm、器高 2.7cm を測る。

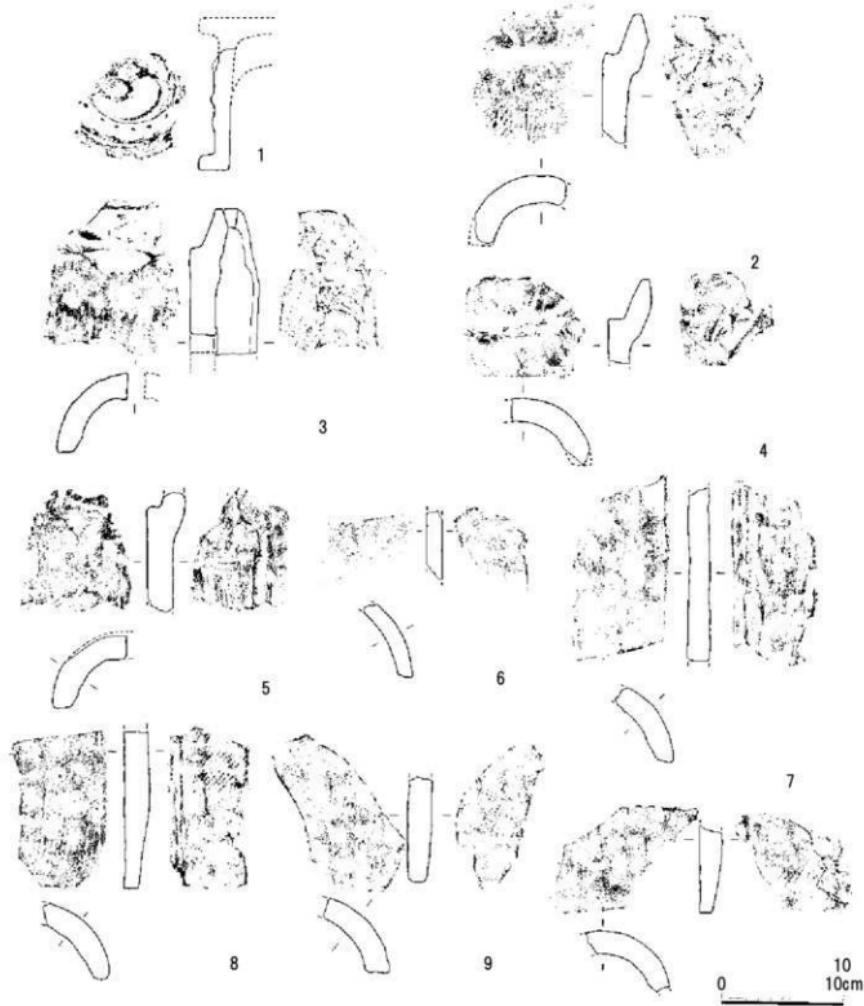
青磁 碗（23）同安窯系碗底部片で、体部と底部の境を打ち欠き瓦玉状にする。

陶器 こね鉢（24）口縁部は内側に厚く突き出し、凹線が 3 条めぐる。無釉で、灰赤色を呈する。

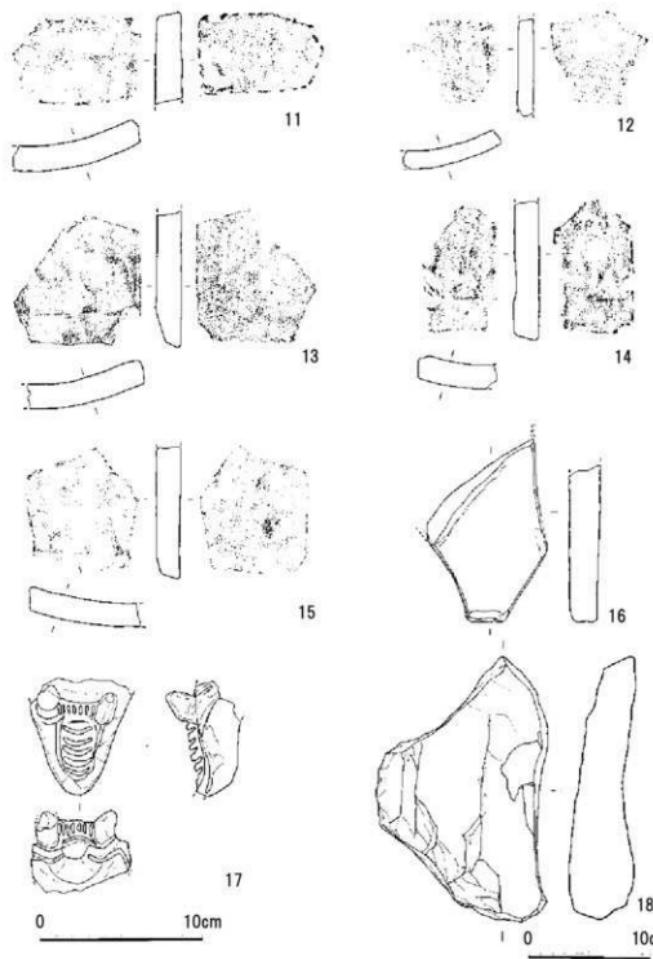
壺（25）底部片で、内面に褐色不透明の釉が掛かる。



第5図 出土遺物実測図1 (縮尺1/3)



第6図 出土瓦実測図1 (縮尺1/4)



第7図 出土瓦実測図2 (縮尺 1/4・1/3)

瓦類 軒丸瓦（1）瓦当の左半部、上部丸瓦との接合部分の大半が欠失する。内区は左巻きの三巴文で、尾は1/3めぐる。内区と外区は圓線で画され、外区には珠文を配し、外縁は1.2cmと比較的高い。

丸瓦（2～10）凸面に繩目叩き、凹面には布目痕が残る。側縁は凹面を面取りする。2～5には玉縁が残る。凸面は玉縁の手前まで繩目叩きし、2・5は叩きをナデ消す。凹面は端部から2cmまで面取りする。8～10は玉縁の反対側の端部が残る。凸面は端部まで繩目叩きし、9は端部から3cmまで叩きをナデ消す。凹面は面取りの後、ナデを施す。

平瓦（11～15）凸面に繩目叩き、凹面には布目痕が残る。11・13～15の側縁は凹面を面取りする。12は薄手の12世紀代の桶巻作りによる中国瓦で、側縁には分割した際の内側からの切込み痕と破面が残る。13～15は端部が残り、凹面を面取りする。

鬼瓦（16）隅棟で用いられた鬼瓦の脚部片で、裏面には離れ砂が残る。中央の半円形の抉りと右側の抉りが残る。

龍（17）龍の上顎で、飾り瓦として用いられたものであろう。

石製品 鬼板（18）右上部の断片で、残存する高さ21.7cm、幅13.5cmを測る。裏面は剥離し、残存する厚さ最大で5.4cmを測る。幅4.5cmの側縁帯がめぐり、下部に向けて曲線的に末広がりになっている。

IV 小 結

今回の調査では現地表下0.9から1.8mまで礫混じりの粗砂（近世・近代の遺物を含む）、同20mまで褐灰色土（近世・近代の遺物を含む）が堆積し、同2m（標高1.5m）以下で15世紀中頃までに埋没した河川堆積、もしくは堀の落ちSD01を検出した。深さ0.5～0.6m（標高0.9m前後）で地山の灰白色砂となり、岸、立ち上がりを検出することはできなかった。

SD01褐灰色粘質土層からは土器器小皿・杯片、明代前半の青磁碗・皿片等の陶磁器の他、瓦片がコンテナ2箱出土した。発掘面積が狭隘な割にはまとまった量で、道具瓦もみられる。調査地の北には矢倉門の地名が残るが、広範囲で門跡の位置は特定されていない。北200mの博多遺跡群第33次調査では、16世紀に掘削された東西方向の大溝SD004が検出されている。幅6.1～9.8mを測る大溝で、調査担当者が報告するように、大規模な防衛線整備の一環として整備されたものであろう。今回の調査で出土した瓦類については、堀推定地に近い位置で出土したことから、寺院というより堀に面した門に葺かれた可能性が強い。

陶磁器の中ではやや先行する時期のものであるが、元代の磁州窯白釉鐵絵花卉文壺底部の出土は特筆される。

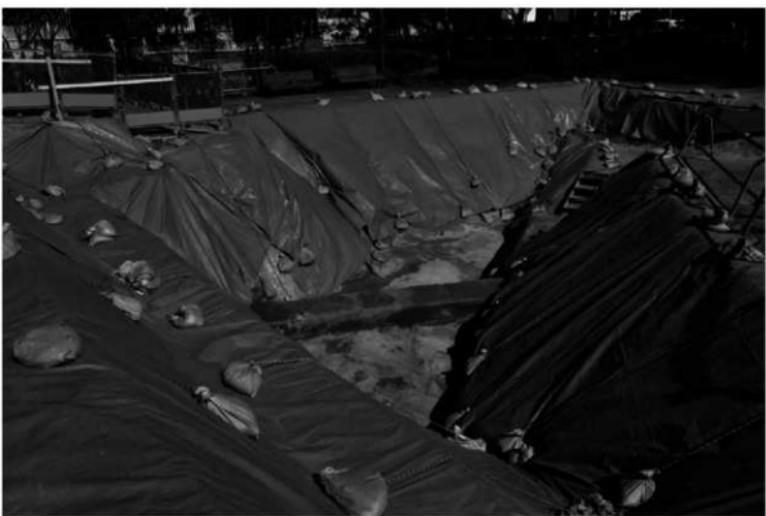
検出した遺構を自然堆積とした場合、御笠川旧河道の一部とみられる。人工的な掘削とした場合、埋土から出土した遺物は大内氏の博多支配の時期に相当し、「続風土記」にある大内氏によって築造された堀の一部となる可能性がある。

◇参考文献

博多遺跡群第33次調査 福岡市教育委員会 1988『博多11』福岡市埋蔵文化財調査報告書第176集



1. 全景（東から）



2. 全景（西から）

図版 2



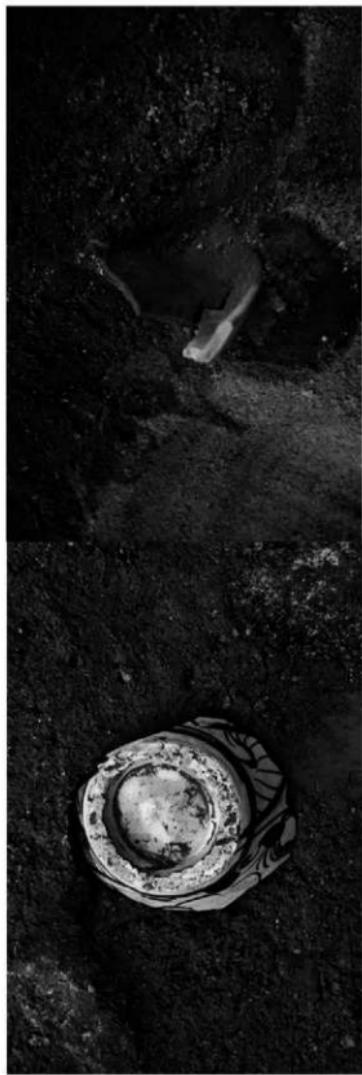
1. 北東壁面（西から）

2. SD1土層（東から）



3. 北西壁面（南東から）

4. 北東壁面（西から）



1. 白地铁绘花并文壘出土状况



3. 陶器出土状况

4. 陶器出土状况

2. 南壁土師器出土状况

報告書抄録

ふりがな	はかた 180						
書名	博多 180						
副書名	博多遺跡群第237次調査報告						
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書						
シリーズ番号	第1423集						
編著者名	佐藤一郎						
編集機関	福岡市教育委員会						
所在地	〒810-8621 福岡県福岡市中央区天神1-8-1 TEL 092-711-4667						
発行年月日	2021年(令和3年)3月25日						
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	北緯	東經	発掘期間	発掘面積 m ²	発掘原因
はかたいせきぐん 博多遺跡群 (第220次調査)	ふくおかしはかたくはかた えきまえ2ちょうめ8ばん 福岡市博多区博多駅前 博多駅前2丁目8番	40132	121 33°24'52"	130°35'28" 20200311	20200114 20200311	158m ²	記録保存
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
博多遺跡群	集落	中世	溝	土師器・陶磁器・瓦類			
要約	<p>今回の調査では、標高1.5m以下で15世紀中頃までに埋没した河川堆積、もしくは堀の落ちSD01を検出した。深さ0.5~0.6mで地山の灰白色砂となり、岸、立ち上がりを検出することはできなかった。</p> <p>SD01掲灰色粘質土層からは土師器小皿・杯片・明代前半の青磁碗・皿片等の陶磁器の他、瓦片がコンテナ2箱出土した。検出した遺構を自然堆積とした場合、御笠川旧河道の一部とみられる。人工的な掘削とした場合、埋土から出土した遺物は大内氏の博多支配の時期に相当し、『続風土記』にある大内氏によって築造された堀の一部となる可能性がある。</p>						

博 多 180

- 博多遺跡群第237次発掘調査報告 -

2021年(令和3年)3月25日

発 行 福岡市教育委員会

福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 高松印刷有限会社

福岡市東区松島1丁目4番10号

